

## 審査の結果の要旨

氏名 園部友里恵

少子高齢人口減少社会を迎えて、教育学とくに社会教育が志向する価値の再考が求められている。それは、成長と発達という再帰性から、再帰的ならざる人々の存在の価値化、すなわち人間観と「老い」イメージの転換を要請する。本研究は高齢者即興劇団を対象に、高齢者の「老い」イメージの変容を検討しようとするものである。

本論文の構成と概要は以下の通りである。序章では上記の課題と対象、目的が設定され、アクションリサーチとエスノグラフィの方法の援用が述べられる。

第一章「高齢者の教育・学習と演劇活動をめぐって」では、教育学における高齢者をめぐる価値が剔出される。そこでは、「老い」を喪失と見なし、その受容という観点から、高齢者の存在承認が導かれていること、及び高齢者と演劇との関係も、「老い」を否定的にとらえ、再帰性の維持が図られていることが指摘される。

第二章「高齢者インプロ実践の試み」では、インプロを演技者と共演者・観客がその場で物語を紡ぐ実践ととらえ、再帰性を価値とする個体主義的な人間観に対して、関係論的な存在のあり方としての「老い」が導かれる。

第三章「インプロ実践から見出される高齢者の学習観と老いの関連」では、高齢者自身がインプロを学ぶ理由として、ボケ防止・健康などの再帰性の価値に囚われていることが指摘される一方で、実践の展開に伴い、できないことに意味を見出そうとする彼らの価値観の変容が見出される。

第四章「インプロ実践における老いの価値化」では、「失敗」は、個体主義的な脚本演劇ではよからぬものだが、インプロでは「新たなアイデア」として価値化されることが指摘される。仮面を用いた「できなくなること」(失敗)を意図的につくる実践では、演技者が言葉から解放され、身体の関係性へと開かれる姿がとらえられる。

第五章「脳梗塞後遺症を有する劇団員をめぐって」では、脳梗塞後遺症という「喪失」を抱えた団員をめぐる劇団内の人間関係が描かれる。「できなくなること」を肯定する団員の姿が見られる反面、その団員に比して自分はまだまし、など再帰性に囚われている彼らの意識がとらえられる。

第六章「「高齢者ではない私」から見た老いの意味とインプロにできること」では、ファシリテータである筆者によって、団員のボケ防止という言葉の裏に、他者に迷惑をかけたくないという思いの存在が見出され、「老い」の関係論的な価値化が試みられる。

終章では、本研究を総括して、「老い」を喪失ではなく、他者と居合わせたその場における関係性つまり再帰的ならざる存在の変化の継起であるととらえ、教育の根幹にある学びを再帰性からの解放ととらえる観点が導かれる。

このように、本研究はインプロ実践を通じた高齢者の「老い」イメージの変容の分析によって、教育学の持つ再帰的な価値に対して、その根幹にある学びを偶然性にもとづく関係性の絶えざる継起としてとらえる観点を提示する。また、インプロ研究としても新たな領域を開くものである。

以上から、本論文は博士(教育学)の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断された。